LAST MAGIC by神戸の森

神戸の森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＡＳＴ　ＭＡＧＩＣ　ｂｙ神戸の森

【Ｎコード】
Ｎ６７６６Ｚ

【作者名】
神戸の森

【あらすじ】
主人公である雄一は魔法使いという存在を知る。
だが雄一は魔法使いなどは信じない。
そんななか雄一は魔法使いたちの波乱に巻き込まれていく。

終わりと始まり（前書き）

まだまだ駄文です。
至らない表現や文がありますがご容赦ください。
ご指摘していただけるとうれしいです。
ですが誹謗中傷はやめてください。

終わりと始まり

第一章　終わりと始まり

住宅街を息を切らしながら走っている百七十ほどの身長で痩せてもいなく太ってもいない黒髪の高校生ほどの男は神谷雄一。

今年の春、雄一は白月学園という高校に入学した。

ちなみにいうと今日が入学式。

だが雄一はそんな大切な日なのに寝坊して走っている。
あと5分で学校につかないと遅刻になってしまう。
「くそ！寝坊したあげく自転車がパンクとかまじありえないって！」
「あぁー、まじでやばいって！」

（キーンコーンカーコーン）

（がらっ！）
「あっぶねぇ」
「雄一、入学式当日から、寝坊でもしたのか？」
この学ランをかっこよく着こなしている男は東城大輔で雄一の唯一無二の幼馴染で親友だ。
「まぁ、そういうなって！、間に合ったからいいじゃんか」
「たしー」
「さっさと廊下に並べ、新入生！」
先生の声で大輔の声はかき消された。
どうやら入学式が始まるみたいだ。

「あぁ、まじだるいって」
「雄一、それが遅刻しかけたやつが言うことかよな」
「遅刻しかけたやつだからだよ」
「それもそうだな！」
こうして、雄一は入学式に遅刻することなく参加した。
しかし、ずっと寝ていたんだが。

「んー、やっと入学式終わったなぁ」
雄一は伸びをしながら大輔に言った。
「はは、校長の話長いしな！てか、お前寝てたじゃんかよ！」
「あっ、バレた？」
「当たり前じゃん！幼稚園からの付き合いじゃんかよ！」

こうして入学式の日が終わった。
幸か不幸なのか雄一のクラスの担任は学校説明会でそこそこ厳しそうだった女の先生で名前は大神智子（おおがみともこ）という人だった。
だが雄一にとってそれは気に留めることではなかった。

それから一週間の間はいわゆる普通の生活を過ごしていた。
だが雄一は気づいていなかった。それもほんの一週間だけだったということに。

入学式が終わり一週間と一日経ったときのことだった。
雄一のクラスに転校生が来たのだ。
雄一はこんな時期に転校生が来たことに少し不自然に思ったがやはり特に気に留めなかった。
「今日は転校生がいるぞ、さっ、涼峯自己紹介をしろ」

大上先生が教壇の横に制服姿で立っている少女に対して言った。
「涼峯暦(すずみねこよみ)です」
そっけなく少女は言う。
「なんだ、それだけでいいのか？」
「はい」
「そうか、ならいい。それじゃあ早速奥の空いている席に座ってくれ」
「はい」
やはりまたそっけなく答えた少女の背は百六十ほどあるだろうか。そんな少女の黒髪のだいたい胸あたりまではあろうかという長い髪を靡かせながら席へ向かった。

雄一はこのとき涼峯のことはあまり気にしてはいなかった。だがあまりいい印象ではなかった。
涼峯はみたかぎり容姿はかなりいい。
だが、なぜか涼峯にはかかわってはいけないような気がしたのである。
いわゆる男のカンというやつだ。
あまりあてにはしないでほしいけど。

「なあなあ、雄一あのこかわいくないか！？」
「たしかにかわいいとは思うけどあんまいい印象ではないな」
「はぁ！？なんでだよ！」
「だってさ普通入学式が終わって一週間後に転校生っておかしいだろ。普通は入学式に合わせるもんだろ。それに自己紹介だって名前しか言わないしさ」
雄一は大輔にそう言った。すると、
「それの何が悪いの？」
と後ろに立っていた、涼峯が話にいきなり入ってきた。
「えっ」

雄一はいきなりだったので驚きを隠せなかった。
「だからなんで悪いの？」
「そ、そりゃ、普通はほかにも言うだろ」
「必要ないでしょう？あなたたちに私のことを詳しく言う必要なんてあるのかしら」
「そ、それは、そうだけど」
口ごもった言い方をした雄一を見て涼峰は
「まぁいいわ」
と言い、スタスタと涼峯は指定された席へと向かった。
「少しおっかねぇな」
と大輔が言った
「あぁ」
「だけど、なんかそんなとこがいいな！」
雄一は、はぁとため息をつき返事もしなかった。

だがそのときの雄一はこの出会いが惨劇につながるとは思わなかったのである。

雄一はこの学校に入って後悔をしたことが一つある。
それはある授業についてだった。
この学校の授業の内容には少し特殊な教科があった。
週に一時間だけだが戦闘訓練という内容の体育、名目は護身術訓練だそうだ。なにやら生徒たちの身を守るため。が目的らしい。

「あぁ、とうとうこの日が来ちまったなぁ」
「雄一、あんまうつなこと言うなっておれっちまでうつになんじゃんかよ」
「はぁ、だってよぉ、次の授業って護身術訓練だったよな？」
「あぁ！そのことを言うなーーーーー！！」

ちなみにこの授業は必須科目でもあった。
つまり、これで単位をとれなければ落第となってしまう、ということである。
そのためほとんどの生徒が嫌だが必死になってやっている科目である。

そして、授業がはじまった。
前にいる先生がメガホンを使い、
「生徒はみな二人組になって、組手の訓練をしなさい」
「その後、生徒同士でけがをしない程度に模擬戦闘をしてみなさい」
と言った。
「なぁ、雄一～、模擬戦闘ってなんだよ。この授業って護身術訓練じゃなかったけ？」
「たしかに！、てか戦闘ってなんだよ？」
「ほんと、ほんと」

雄一が大輔と話をしていると、遠くから歓声が上がった。
「おぉ～」「強いなぁ」「もう最強じゃね」
などの声が上がっている。
その先にいたのは、学年で一番がたいがよい山内将太（やまうちしょうた）だった。
「やっぱ、山内は強いなぁ～大輔？」
「ふん、おれっちは男子なんかには興味ねえもん」
「でもたぶん山内の相手になるヤツはいないと思うぜ？」

そんなことを言っていると、別のところでもまた歓声が沸きあがっていた。
それも山内の時よりも大きい歓声が。

歓声が沸きあがっている場所にいたのは、
涼峯暦だった。

歓声が沸きあがっていた中心には涼峯暦がいた。

「なぁ大輔、っていない！？」
となりに居たはずの大輔にしゃべりかけたが、どこにもいなかった。
「涼峯さん！めっちゃ強いんやね！」
「べつに」
いつのまにか涼峯にアタック？というのか話しかけていた。
（てか誰もいないのに誰かに話しかけた俺って…まじで痛い子じゃんかよ…）と雄一が内心考えていた矢先だった。
「おぃ！じゃまだ、どきやがれ！！」
山内が人混みを押しのけて涼峯の前へとたった。

「おぃ！そこの女、俺と勝負しろや！」
「だれ？、うざいし暑苦しいんんだけど」
「はぁ？だが関係ない、とにかく勝負しろっつってん…」
（ごすっ！）
という鈍い音がして急に山本の声がなくなった。
なくなったというよりも声をだせなくさせた。
涼峯の回し蹴りが山本の顔面に直撃した。
「よわ」
と涼峯が吐き捨てた。
山内は顔面に蹴りをくらい気絶してしまっていた。
雄一はとっさに前へと出ていき、
「いきなり蹴るのは卑怯だろ！」

とつい言ってしまった。すると、
「なにあんた？またいちゃもん？相手から吹っかけてきたんだからいいじゃない」
と涼峰は返事を返した。
「だからって不意打ちは卑怯だろ！」
「油断したやつが悪いのよ」
と涼峯がいったとき、
（キーンコーンカーンコーン）
チャイムがなった。
無言で涼峯はクルリとまわりどこかへ行ってしまった。
「いや～、山内を一撃で倒すとは強いなぁ」
大輔が雄一の横にきて、いやはや感心、感心といった感じで話しかけてきた。
「たしかにそうは思うけど卑怯だ」
「べつにいいんじゃねぇの？だって山本から吹っかけたんだしさ」
雄一は返事をせずに教室へともどった。雄一はこのみんなが唖然としているところに一秒でも長く居たくなかった。

このとき雄一は心でこう決めた。

雄一はもう何があろうとぜったいに涼峯暦にはかかわらないでいこうと。

前の護身術訓練のあとというものの涼峯暦の人気はうなぎのぼりだった。

容姿端麗、あげく護身術にも長けているからだった。
まぁそんなことはおいておく。

今日の最後の授業中のことだった。

「えぇ～っと、よし、涼峯この問題を解いてみろ」
「おぃおぃ、あのじじいまた生徒にちょっかいで難しい問題ふっかけやがった。しかもまだやってない範囲の問題だぜ」
「大輔、あのじじい竹永吾六（たけながごろく）がいつもやってることなんだから気にすんなよ」
「そうだけど、涼峰だぜ？あてられたの」
話している間にも時間は進んでいる。
前では、
（カッカッカッカッカ…）
「えっ？」
「うそだろ？」
教室中からいろんな声が聞こえてきた。
「できました」
「な、なに？えっ、せ、正解だ」
竹永は、ずれた眼鏡を手で直しながら言った。
（キーンコーンカーンコーン）
「すごい、あの先生を負かしたぞ」
「俺さ大輔。あんま涼峰の話はしたくないんだよね」
「もう！わかったよ！でも一つ聞きたいんだがなんで涼峯にかかわりたくないんだ？」
「なんか嫌な感じがするんだよ」
「嫌な感じって？」
「なんかこう、なんていったらいいかわかんないんだけどあいつの近くはなんか違和感が感じてさ」
「ふ～ん、よくわかんねんなぁ」
「俺もだよ」
「じゃあ俺は部活の見学いくからな～」
「おう」
「また明日な」
「おぅ！！、また明日」

雄一はいわゆる普通の高校生の放課後の会話をしていた。
だがこのとき雄一は気づかなかった。
涼峯に話を聞かれていたことに。
そして雄一の背中を見ているものが別にいたということに。
雄一はそんなことを気づかないで一人で帰り道についた。
その帰り道のことだった。
雄一は…人ではなくなった…。

帰り道。
雄一は一人で歩いていた。
いつもなら人が少なからずいるはずの道なのに今日に限ってだれもいない。
「なんでだれもいないんだろ」
「まぁ、いいか」
雄一は周りに人がいないからなのか声に出してしまっていた。
そのときだった。
前に人が現れた。
向こうの背中の後ろには夕暮れがあり相手の姿は逆光のせいで顔を見ることはかなわなかった。だが服装は少なからずわかり老紳士がかぶりそうな帽子にコートしかもどちらも漆黒の色だった。
向こうはいきなり雄一に話しかけてきた。
「君が神谷雄一君だね？」
雄一は相手に名前が知られていたことにとまどい返事ができなか

った。
「反応なしか。まぁ、君が神谷君ということで話を進めよう」
「君は魔法を信じるかい？」
「えっ」
「信じているのかと聞いているのだが？」
「魔法なんて、信じてないですけど」
「ではあるとしたらどうする？」
雄一はこの人はどこか頭でも打ったのか？、と思ってしまった。
雄一は無視して通り抜けようとした。
その時だった。

雄一は１０？ほど宙に浮かび腹に男の右腕が貫通し死んだ。

ハッと目が覚めた。
「なんなんだよ。いまのは」
「ふはははは。今のはただの幻覚だよ、魔法で見せたんだよ」
「君は本当になにも知らないんだね」
「えっ？」
雄一は意味が分からなかった
男がなにを言っているのかさえも分からなくなるほどに混乱していた。
「だけどそんな君には魔法使いになる素質があるみたいでね」
「だから私が君を向かいに来たんだ」
「えっ…なんなんだよ…夢なのか…？」
雄一は本当に意味が分からなかった。
まったくと言っていいほどに。
「俺は普通の高校生だ！普通の生活を送っている、ただのどこにでもいるような高校生なんだぞ！？」
「はぁ、物分りが悪いね」
男がため息交じりに言った。

「ついてこないというなら、君をさっき見せた幻覚と同じように殺すよ？」
「なんで…なんで、俺なんだ！？」
雄一は男に強くだがおびえながら言った。
「君には素質がある、それだけだよ」
「…うそだ…いやだ…俺には…そんな…」
雄一は恐怖なのだろうか、よく分からない感情で少し泣きそうになっていた。
「ならば君は生かしてはおけないね。私たちの組織へとこれないのであればね」
「私たちの敵になられても困るしね」

「うわあああああああああ！！」
雄一は無我夢中叫びながら走った。
怖い。
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。
早く逃げないといけないと思っていた。

しかしその思いは届かなかった。

男はどこに逃げても、雄一の目の前に現れる。
「なんでだよ…なんでなんだよ！」
「そうやって逃げても無駄だよ」
「助けはこない」
「人除けの魔法を使っているからね」
男は淡々と言った。まるで泣きわめく子供をあやすように…。
「だから…人がいないのか…」

雄一は地面に膝をついた。
身体が動かなくなったのだ。
もう逃げれないとわかってしまい。
恐怖で座りこんでしまったのである。
雄一の目の前には絶望と死しかなかった。
もう心の底からあきらめ、助けはこないとわかり小さい希望さえも失ってしまったからであった。
「もう一度聞こう…一緒にくるかい？」
男はもう一度聞いた。
「…いやだ…俺は…魔法なんて使えないし、素質もない…それにそんな普通じゃないことに巻き込まれるなんて絶対にごめんだ…」
雄一は涙で目の前が見えなくなっていた。
「そうか、残念だよ…君を殺すことになるとはね…素質があったのに…」
男は本当に残念そうに、顔を落とした。そのときだった。

（バキャ）
雄一は男に腹を蹴られ宙に浮いた。
（グシュ）
変な音とともに激痛がはしった。
「ガ……」
雄一は声を出すこともできなくなった。
「さよなら…神谷雄一君…」

雄一は死んだ。
殺された。

幻覚と同じように腹が破れ。
だが雄一は知らなかった。
これが終わりではなく始まりだということに…

「ここは…どこだ…？」
雄一は暗く、
深い、
まさしく闇。
というところに立っていた。
いや、立っていたというよりも浮いていたなのだろうか。
それよりもいた、存在した。といったほうが近いかもしれない。
というよりも、いたというよりも意識がその中に浮かんでいるというのだろうか。
いや、違うのかもしれない。
だが予想はついた。
「俺は…死んだんだな…」
「ここは…いわゆる死者の世界なのか？それとも天国？いや…地獄…？」
「わからない…わからない…」
「もう…誰にも会えない…家族にも…友達にも…大輔にも…」
「いままでみたいな普通の生活をおくることさえもできない…」
「死んだ…俺は…死んだ…」
雄一は耐え切れなくなった。
もうどうにかなりそうで怖くてつらくて。
「うわああ

あ、うあああ

そのときだった。
「私があなたを助けたのよ」
「魔法の力でね」
涼峰が言った。
それも理解ができないようなことを。
「えっ？」

雄一はわけがわからなかった。
ふと心の中でこう思った。

あぁ、まだ夢でも見てるのかなぁ。
と。
そしてもう一つ。
あのまま、

あのまま、死んだほうがよかったのではないか。

と。

普通ではない生活、非日常の生活。

決して、

決して常人が立ち入ってはならない領域へと踏み込んでしまったのではないだろうか。

雄一は、

そう雄一は決して立ち入ってはならない領域に踏み込みこんでしまったのであった。

終わりと始まり（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

続きを待っていただけると非常にうれしいです！！

魔法使い（前書き）

評価、感想を気軽にしてくれるとうれしいです。

第二章　魔法使い

「涼峯…お前も魔法使いだっていうのかよ？」
雄一は涼峰にたいして苛立ちとともに疑問を投げかけた。
「えぇそうよ」
涼峰はさも当たり前といった様子で言った。
「お前は俺を殺そうとしたあの男の仲間なのか…？」
雄一は少し身構えながら聞いた。もしかしたらあの男の涼峰は仲間なのかと思ったが、
「それは違うわ。やつらは敵よ」
この一言で少し安心はできた。
だが、まだ涼峰のことを信じれない部分もあることもたしかだ。
「ちなみに言っておくけどあなたも魔法使いなのよ」
「えっ？」
涼峰はさらっと重要なことを言った。
「いやいやいや！なにそれ！」
「だからあなたも魔法使いになったの、何度言わせる気なの？」
「なんで…どういうことだよ！？説明してくれよ！！」
「そうね、しないといけないわね」
涼峰は少し意味深げな表情でそう言った。
「もともと魔法使いとは正式名称ではないのよ」
雄一は声には出していないが驚いた。
雄一はもともと魔法使いは正式名称もくそもないと思っていたからだ。
涼峰は話を続けた。
「魔法使いは魔力転換法を使えるもの達のことを指すの」
「ま、魔力転換法？」

いきなり意味の分からない専門用語てきななにかが飛び出した！
「そう、すべての人間、生物には少なからず魔法の力―魔法を発動するための力―。通称魔力と呼ばれるものを持ってるの、でも普通は魔法を使えない」
雄一は魔法使いとはそんなに深いものだったのかと不思議でしょうがなかった。
「なんでだ？」
「普通の人間や生物には、魔石と魔血（まけつ）と呼ばれるものがないからよ」
「魔法使いになるには魔血がいるの」
「魔石とはね、その人の魔力の源。これは私たち魔法使いにとっての心臓なのよ。そして魔血とはいわゆる魔力を含んだ血。それともう一つ言っておくけど魔血がないと魔法使いは生きられないわ」
涼峰は話を続ける。
「魔法使いは魔法使いからしか生まれない。ただしもう一つ魔法使いになる方法がある。それは魔血を身体につくり、魔石を埋め込むしかないわ」
「普通は無理やり魔血をつくれば人は死んでしまう」
「けれどそうしないと人間は魔法使いになることはできない。才能、素質がないと魔法使いにはなれないのよ」
「死ぬ人はたくさんいるわ」
「魔血をつくってもらった大半の人は死んでいると思ってくれていいわね」
「あなたはさっきまで死んでいた。腹に重傷を負って血がどんどんなくなっていってね」
なっ、と内心思ったが声が驚きのあまり出なくなっていた。
「でも一つだけ、一つだけあなたを助ける方法があった」
「あなたの心臓は止まっていた」
「だからその心臓の代わりに私はあなたに魔石を埋め込んだ。」
えっ…それってまさか…雄一はある仮説にたどり着いた。だが涼

峰の話は進む。
「魔石は魔力の源。力を与えてくれる。それは生の力にもなるし死の力にもなりえる」
「だから私はいちかばちかあなたに魔石を埋め込み魔血をつくった」
「あなたは魔法使いになるための素質があったから…」
「もしかしたらって…」
雄一はもう分かった。
今、雄一が生きていられるわけが。
雄一には…
「そうしてあなたに魔石を埋め込んで魔血を作った」
「だからあなたは生きている」
涼峰は少し悲しそうな顔で言い放った。
「待てよ、それじゃあ俺はもう心臓がないんだよな？」
雄一は冷静を装いながら涼峰に質問をした。
返事は分かっていた。
「あなたには心臓はない。その代わりに魔石がある」
「つまり。もうあなたは人じゃない」
「もちろん私もね」
涼峰はきつい口調で言い放った。
「人である神谷雄一は死んだのよ。これからのあなたは魔法使いの神谷雄一なのよ」
涼峰は今までで一番きつい口調と大きい声で雄一にその言葉を言った。
「まぁ、感謝してほしいわね、一応は命の恩人なんだから」
涼峰はかなり目上からえらそうに言った。
たしかに命の恩人ではあるとはいえ…
「にしてもあなたはなにものなの？」
「あいつらには目をつけられるし、私の魔法にも少なからず気づ

いていたしあなたは何者なの？」
「しらねぇよ。あいつらは勝手に俺に魔法使いの素質があるとか言ってただけだし」
「てかお前の魔法ってなんだよ！」
雄一は涼峰が魔法を使っていたという事実に驚いた。
「別に私は学校では人除けの魔法を使ってただけよ」
だから人気はあってもあいつの周りには人がいなかったのか。
一人で納得した。
「まぁ、あなたのお友達さんにはなんか効いてないみたいだけどね…」
そーいえば大輔はよく涼峰にアタックしているなと思った。不覚にも少し笑いそうになってしまった。
じゃあ本題に戻るけどと言い涼峰は話を戻した。
「あなたには魔法使いの素質があるって言われたんでしょ？」
「あぁ、そうだ」
「ならあなたは魔法使いになってよかったと思うわよ。私もあなたに魔法使いの素質があるって思ったから魔血を作ったんだから」
「だけど、だれがそんな方法で生き返らせて欲しいって言ったんだよ！」
雄一はいまの気持ちをそのまま涼峰にぶつけた。やつあたりだった。だけどいまの雄一にはそんなことまで頭が回らなかった…
「俺はもう人じゃない！人である俺はもう死んだんだ！！」
「そうよ、それがどうしたの？」
涼峰は涼しげに聞いた。
「こんなことになるなら…」
「死んだままのほうがよかった？」
「それなら殺してあげようか？」
涼峰は淡々と告げていった。
きっと本当に雄一をいつでも殺せるのだろうと雄一は思った。
だからなのかもしれない。

雄一は返す言葉が出てこなかった…
「うっ…」
「本当は生きたいんじゃないの？」
涼峰は少し悲しげな表情で雄一に聞いた。
「そりゃあ…生きたいさ！！だけど俺は人じゃない！！もう普通の生活には戻れない…もう…どうせ、俺はもう人じゃない…化け物なんだ…」
雄一は涙を目に溜めながら言った。
「失礼じゃない？魔法使いは確かに人ではない。だけど化け物でもないわ！私たち魔法使いは魔法使いということに誇りを持ってるのよ！次にあなたがそういうことを言ったら私があなたを殺すわよ」
「第一ね、普通の生活？そんなのどうでもいいわ」
「やつらに…あなたを殺そうとしたやつらに復讐するために私の力になりなさい！」
雄一は涼峰に言われ”復讐”という言葉について少し考えた。

俺があの男に復讐をするには覚悟を決めないといけない。
覚悟というのは魔法使い相手に復讐をするということは殺す覚悟、そして殺される覚悟がないといけないということだからだ。
確かに俺はあの男に復讐がしたい！
今までの平穏をなくされた。
壊された。
失った。
だから俺は覚悟を決める。

「わかった…」
雄一は決めた。
「だが、一つだけ言っておく」
「なに？」
涼峰が深い顔で聞く。

「俺はお前の力になるつもりはない」
「なっ…あなたは復讐がしたくないの！？」
雄一は首を横に振り言った。
「俺はもとの昔の普通の生活に戻るために」
「戻るためやつらを倒す！」
雄一は強く涼峰に言い放った。
「やつらに勝てるのが魔法使いだけなら、復讐ができるのなら俺は魔法使いにだってなんにでもなってやる！！そしてあの男を倒して俺はもとの生活に戻るんだ！！」
雄一はいまの気持ちを涼峰に素直に言った。
涼峰に力を貸すとかはどうでもいい。
雄一はあの男に復讐がしたい。
そのためだけだけだ。
「ふん、いい度胸じゃない」
「いいわ、あなたにはこれから魔法使いとして戦うためのすべてを教えてあげる」
「やつらを倒すため、自分の身を守るためにね」
「せいぜい死なないように努力しなさい」
そう涼峰は言って今日は一度帰りなさいと言い残しどこかへ消えていった。

こうして人である雄一は死んだ…

そして雄一は魔法使いとして生きることになった。

魔法使いになってからの生活は少ししか変わりはなかった。
少し驚いたのは傷の治りが普通のときよりもかなり早いということだ。

学校ではまた大輔とつるみ放課後は涼峰に河原で稽古をつけてもらっていた。
稽古といっても組手で身を守るためのことばかりだった。
もちろん、人除けの魔法は使っているらしい。

じつはまだ学校が始まって一週間後に涼峰が来てその二日後に雄一は殺されかけそこからま二日たったのが今日だ。
つまりまだ学校が始まってすぐだ。
魔法使いになったという実感はまだなかった。
だが雄一はきっと強くなっているんだろう。
そう信じたい…
じゃなかったらこんな組手やってられるかってんだよ！

「うわぁ！」
雄一は涼峰に回し蹴りを食らった。
「それでいいのよ！初めてね」
雄一は初めて涼峰の回し蹴りを腕で防ぐことができた。
だが軽く５ｍほど飛ばされるんだが？
「はぁ、はぁ…」
雄一は息を切らしながら涼峰の回し蹴りや掌底を受け身を取りながら身を守っていった。
まじで痛い。いい加減やめてくれないですかね、涼峰さん。ほんと、お願いですから。
腕が死にそうです。泣きそうです。いくら傷の治りが早いからって、一応山本はあなたの回し蹴りで一撃で気絶したんですけどね。分かってますよね？あなたの攻撃をまともに受けたら、
「ぐはっ…」
「なにしてるの！ちゃんと受け身しなさいよね！一応、加減はしてるとはいえ怪我するわよ」
いや、受け身を取ってて、なお痛いあげくその受け身を取れない

ような攻撃は無理だって、まじで。
「な、なあなあ涼峰」
「ん、なに？」
「そろそろさ、魔法とか教えてくれよ」
「ここずっと組手じゃん？そろそろ魔法を教えてほしいなーみたいな」
「そうね、いいわよ」
「やっぱ、だめですよねー…えっ？いいの！？まじで！？おっしゃ！」

雄一は涼峰にやっと、やっと！魔法について教えてもらえることができるようになった。
まぁ結局、今日はずっと組手だったけど…
でも明日は魔法についてだ。

魔法使い（後書き）

読んでくださりありがとうございました！
次回にご期待ください。

気軽に評価、感想をしてください！

魔法使い　その２（前書き）

まだまだ駄文で至らない表現がたくさんあるかと思います。
ですが容赦せずに感想を言ってください。

※誹謗中傷はやめてください。

魔法使い　その2

次の日の放課後になった。雄一は学校では疲れた体を少しでも回復させるためにずっと寝ていた。ときどき先生に起こされてしまったが。

そして場所は変わって河原。

目の前に学校の制服を着ている、涼峰が立っている。

「じゃあ魔法を教える前に魔法について知ってもらう必要があるわ」

「わかった。どんどん説明していってくれ」

「わかったわ。じゃあどんどん説明していくからね」

そういって涼峰は説明を始めた。

「じゃあまずは魔法には属性があるってことを知っておいて」

「属性？あぁ～、いわゆるゲームとか漫画とかで出てくるやつか？」

「まぁだいたいはそうと考えてもらっていいわ」

「魔法にはいくつか種類があるの」

「回復魔法や封印術、幻術を解いたり光の式神を使える白魔法。名前のとおり魔力の色は白色」

「炎や水とかの自然の力を操ることのできる緑魔法で一番使えるものが多くて一番代表的ね。これも名前のとおり魔力の色は緑色」

「幻術や呪い、闇の式神が使える青魔法。これは魔力の色が藍色」

「だいたいはこの三つね」

そういい魔法の属性とやらを説明された。

「そうなのか、めんどくさいなぁ」

「そんなこといわないでくれるかしら説明するのがいやになるじゃない」

涼峰は少し嫌な顔をしながら言った。

「でもあと二つ種類があるの」
「これだけじゃないのか」
雄一は少し鬱になりそうだった。
雄一はもともと勉強とかは苦手で覚えるのとかがあまり得意じゃないし…っと考えてる間にも話は進む。
「まずは光魔法、これは光の力を操ると言われていて闇魔法を打ち破ることができるといわれているの」
「闇魔法？」
雄一が質問をしたら、
「それも説明するから黙ってて」
怒られてしまった。
説教されてるわけじゃないけど説教されてるみたいな心境だよ。
「だけど私にも光魔法はよくわからない…」
「これは古い書物にしか書かれてないの」
「存在すらしないとも言われてるけどね。ちなみに魔力の色は、光のように輝いているとか黄色といわれてるわ」
「最後がさっき話しにも出てきた闇魔法」
「これはその名の通り闇を操る魔法のこと」
「これは青魔法以上の幻術や呪いをあつかえて闇の式神を超える闇の魔獣を従えられる魔法を使えるの。魔力の色は漆黒の黒色といわれてるわ」
「といっても二つともほとんど使えるものはいないんだけどね」
「だ―どただ――闇魔法を―える―のが――んだけどね…」
ぼそっと涼峰はなにかを言った。
「ん？なんて？」
なんでもないといって涼峰は質問に答えてくれなかった。
「たくさんあってまじでめんどくさいなぁ」
「これぐらいは常識よ、常識」
「そうなのか」
雄一はさも当然といった具合に言われてまだまだきっと覚えるこ

とがあるんだろうな。と悟った。
これからも大変なことになりそうだ。
「じゃあ、いまからあなたの属性を調べましょうか」
「ま、まってくれ！いきなりすぎるだろ、てか涼峯はなんなんだ？」
「ん？結局は知らないといけないしね。てか私？私は白魔法を使うわ」
「ふ～ん、だから俺を助けれたのか」
「そうよ、じゃあこの札をもって」
「なにこれ？」
よくわからんお札を渡された。
こんなんよりもお札をくれたらいいのに…と思ったのは秘密だ。
「今のあなたは魔血は流れてるだけの状態。コントロールできてないのよ」
「最初の一度はこの札の力を借りて魔力をコントロールするのよ」
「つまり最初の儀式みたいなものね」
儀式ねぇ…もっと堅苦しいものを想像したけど案外楽そうなのでよかった。
「魔力をコントロールすると身体の一部とかどこかしらが属性の色になるのよ」
「そうなのか…」
「じゃあやってみて」
「えっ…やりかた知らんけど？」
「札を握って力を込めたらいけると思うわ」
「わかったやってみるな」
（ひゅうううう）

少し風が出てきた。
というよりも雄一から少しだけ風が流れているようだ。
もしかして風とかを操る緑魔法使いなのかもしれないなと雄一はなどと考えていた。
その時だった！
「な、なんだこれは！？」

「うっ、目も開けれない。この魔力の光はなに！？」

「ふぅ」
「おさまったみたいね」
（どすっ…）
雄一は急に視界が暗くなって少しずつ意識がなくなっていった。
涼峰が駆け寄ってくるのが見える…ってあれ…

「はぁ、使える魔力が尽きたみたいね」
「魔力の大きさは大したことはないみたいだけど」

「でもさっきの魔力の色はなに？」
「緑や青じゃなかった」
「もしかして白魔法？」
「いや、白魔法っていう感じの色じゃなかった」
「まさかとは思うけど、光魔法？」

「そんなはずないわよね。でももしもそうならあなたは私たちの希望になるのかもしれないわね」

「それにしてもあなたは」
涼峰は倒れた神谷雄一を見ながら

「あなたはいったいなんなの？」

雄一が目を覚ました場所。目を開け見えた景色は灰色の天井。雄一は上半身を起こして、周りを見渡すと生活感がまったく感じられない部屋だった。小さいテーブルそれ以外には山積みにされた段ボール箱しかなかった。

（がちゃ）

扉を開ける音がして白色のＴシャツにジーパン姿の涼峰が現れた。

「起きたみたいね。調子はどう？」

涼峰が聞くので雄一はきちんと言った。

「体中が痛い」

「うん。大丈夫みたいね」

「まぁ、いいけどさ…で、ここはどこ？」

「ここは私たちが生活をしてる拠点よ」

雄一は私たちという言葉に多少、気に留めていると、

「とりあえずこっちに来なさいよ」

涼峰が手招きをするので雄一はベットから降り素直に涼峰が行った部屋のほうへと移動した。

そこにはぼろぼろのソファとこれまたぼろぼろの木の少し大きめのテーブルがあり、そこにはある男が座っていた。

背の高さは座っているから詳しくは分からないがかなり背が高い。軽く１８０ｃｍはあるだろう。だが体は全体的に細い。髪の毛は淡い赤色がかっている。しかも服装はジーパンにＴシャツとかなりラフな格好だ。

気づくとその男はこちらを見ていて、にっこりと笑い、

「よっ、大将！元気か？俺はウォンだ。ちなみに暦と同じ組織、王立協会のメンバーだぜ。よろしくな！」

「あっ、はい。よろしく…お願いします？」
雄一は少し唖然としていたがまぁ挨拶は大切だし涼峰よりかは人間ができてそうだ。
「ちょっと、ウォン！その話はまだしないでって言ったじゃない！」
そういいながら涼峰はカップラーメンを三つお盆に載せて持ってきた。
「おっ、やっと飯か！まぁ、話は食べながらってことで！」
そう言ってウォンは割りばしを器用に片手で割りもう片方の手でふたをとっていた。
「まぁ、いいけど」
涼峰は言った。
二人とも食べ始めたので雄一も食べる。
「で、さっきウォンが言ってた、王立なんちゃらってなんなんだ？」
雄一は少し落ち着いたところで二人に話を振った。
「よっしゃ！俺が…」
あんたは黙っててと涼峰がウォンの顔の前に手を伸ばしウォンを止めた。
「私が分かりやすく説明するけど、私たちが所属している王立協会は通称ロイヤルソサエティそう言われてるわ。ほかにも組織はいくつかあってね、あなたを襲った男の組織は闇魔法協会。こいつらが私たち魔法使いたちでは一番の敵。かなりの所属メンバー数でしかも強い。そして悪魔たちの組織、暗黒協会、ダークネスソサエティこの三つの組織が近年、拮抗してるのよ」
簡単にまとめるとこうだ。
涼峰やウォンが所属している組織が
王立協会（ロイヤルソサエティ）
雄一を襲ったやつらの組織が

闇魔法協会
そして悪魔？たちの組織が
暗黒協会（ダークネスソサエティ）

「って！悪魔！？」
「えっ、えぇ。なにを驚いてるの？」
雄一は悪魔と聞いてまがまがしい化けものを想像した。ケルベロスとか？いや。あれはそもそも、悪魔なのか？
「それで拮抗してるって言ってたけどさ、どんな風になんだ、涼峰？」
「そうね、簡単に言うと戦争なんだけど闇魔法協会が暗黒協会を従えさせようとしてるのよ。力を手に入れるために。だけど暗黒協会の悪魔は人間以上の魔力を持ってるし身体能力も高いからね。で暗黒協会は魔法使いを根絶やしにしようとしてて私たちも狙われて闇魔法協会はこっちに対して引き抜きをやったり拠点を襲ったりとしてるのよ。あっ、ちなみにあんたも王立協会に所属してるからね」
「へぇ、なかなかに大変だな。…ん？って、なんで俺が所属されてんの！？」
「そりゃ、野良の魔法使いなんて殺されるからよ？執行人たちに」
「まぁ、いいけどさ…、てか執行人って？」
雄一は新たな単語について聞いた。
「簡単に言えばな！処刑人みたいなもんだ！だがまだそいつらのリーダーは分かってないんだよ。ずずっ」
三つ目のカップラーメンをほおばりながらウォンが言った。雄一は単に警察みたいなもんかと解釈した。
「そっか、てかさ、今まで普通にしてたけど俺は昨日なにがあったんだ？」
「それについてはウォンと話し合ったんだけど、あなたはね、おそらく光魔法を使えるのだと思うのよ」
「そうなのか？」

「たぶん、ね。でもあなたは使える魔力がそこまで多くないのよ。それで使える魔力がほぼ空っぽになっちゃったから倒れたっていうわけ」
「なるほど…って！光魔法！？なんで俺がなんだよ！」
雄一は純粋に驚いた。自分がいまだ謎の光魔法を使えるということに。
「知らないわよ。だから魔法研究家のウォンがいるのよ」
「ほぉうだ！（そうだ！）」
ウォンはいつのまにかカップラーメンを五つ目に突入していた。てか食べながらしゃべるなよ。とか思ったのは口にはしなかった。
「ということであなたは今日はウォンに魔力の検査とかをしてもらってね。明日からはウォンが魔力の細かいコントロールについて教えるから」
「あぁ、分かった」
「よし、大将！いくか！飯も食ったことだしな！」
ウォンが立ち上がり笑いながら言った。本当に無邪気なやつだ。

そうして雄一はこの日ウォンに血液をとられそしてまた魔力を出させられて魔力も検査に回された。

「結果はどうなんだ、ウォン？」
「やっぱ大将の魔力は白、緑、青どれでもないな。考えられるのは闇か光だな。だが魔力の色からして闇ではない。きっと光魔法だろうなぁ。こりゃ、貴重なサンプルだな」
ニカッと笑いながら雄一に言った。
「そ、そうか。そういえばウォンはなに魔法使いなんだ？」
「ん？俺か？俺は悪魔だからな、魔法は使えん」
「へぇ～…って！悪魔っすか！？魔法使いじゃないの！？」
雄一はかなり驚いた。悪魔はまがまがしいものと思い込んでいたので人としか思えないウォンが悪魔と知ったし、しかも魔法が使え

ないなんてもうなにがなんだか…
「なに驚いてんだ？悪魔なんてザラだぞ？」
ははと笑いながら言った。だが、少し疑問が浮かんだ。
「でもさ、さっき悪魔は魔力が多いって言ってたけどさ、魔法使えないんだったら意味ないんじゃない？」
「いんや、それがいろいろとあるんだよ。悪魔っていうのは魔力を使って高い身体能力をもっと高くしたり、ほかにも炎や水を操ったり特殊な力を使えるんだよ」
「まぁいいや…もう、うん。俺はもういろんな非日常を経験したんだからこれぐらい…」
雄一が、がくっと首を下ろしたところに（がちゃ）という音がした。
「どうなったの？」
涼峰が入ってきた。
「いや、やっぱ光魔法だと思うぞ」
「やっぱりね」
「じゃあ今から少し出かけるから」
そう言って涼峰は出て行った。
「ちょっと待て、暦！ってあぁ、行っちまったか…」
「どうしたんだ？」
雄一は顔色を変えたウォンに驚き聞いた。
「いや、な。カップラーメンを買ってきてもらおうと思ったんだけどな…」
「そんなこと！？なら俺が買ってきてやってもいいぞ？」
「ほ、本当か、大将！？なら千円渡すからこれで買えるだけ買ってきてくれるか！？」
急に大声で雄一に言ってきた。顔が近い。もう興奮してるのが手に取るようにわかる。
「あ、あぁ。じゃあ行ってくるよ。ウォンも行くか？」
「いや、俺はまだ大将の魔力について調べないといけないからな」

そっかと雄一は言って部屋を後にした。

「う～ん、こんなにのんきにしてるのは久しぶりだなぁ」

雄一は伸びをしながら言った。夕暮れでどこからかカラスの声が聞こえてくる。のどかだった。今までからは想像できないほどに。

「ん？」

雄一は後ろから気配がしたので後ろを振り向いた。そこには深く帽子をかぶり、コートの男が立っていた。

魔法使い　その２（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

次話にご期待ください！

気軽に感想、評価をお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6766z/

LAST MAGIC by神戸の森

2011年12月27日00時56分発行